

「挨拶」

ようこそ、異国の方よ！

ここにあるのは、どこまでも広がる砂漠、そして紙に落とした数滴のインクのようなオアシス——ああ、蜃気楼のような！——捉えどころのない、しかしその存在を確かに感じさせる、地平線に沈みつつある太陽の放つ、あの光にも似た……

だから、異国の方よ！

もしかしたら、何もない、殺風景な部屋にいると錯覚するかもしれせん！

でも、それでも、どうか、窓を開けてほしいのです。幾重にも鍵穴の待ち構える、しかし一つも鍵を必要とはしない窓を……

そして、異国の方よ、感じていただきたい！

そこを通り抜けていく風を。それは、きっと軽やかな風でしょう。思わず笑い出したくなる、わけもなく楽しい気分になれる、そんな風の音を……

「第二の序文」

この作品には、序文が一つでは物足りない。二つ、いや、三つの序文さえ要求されている。

幼いころに夜道を一人で歩いたとき、その孤独に耐えきれず震えていた私を、月が照らしてくれた。

あの時のように、静寂に耳を傾けながら、今日という良

き日に、私は自分について、自分と語り合おう。

「私の誕生」

天空を父とし、大地を母として、私は生まれた。

私は声を上げることもなく、涙を流すこともなく、静かに微笑んでいたという。

私は笑いの化身である。

「私の身体」

私の肉体は弱い。そして、敏感であった。数々の病が私を襲い、私はまるで病気の博物館のように、伏せていた。

そこは一個の戦場であって、戦端が開かれてしまうと、優勢になった側が突如として潮のように引き下がり、そうかと思えば、追い込まれたものがときに力を盛り返す。

衝突と離散、分離と混合、産出と破壊を繰り返す、この世界の縮図としての私の肉体！

その様子を、醒めた眼と安らかな心で眺めている私の魂、山の頂から見下ろすように……

散り散りに引き裂かれることを、己の内で学んだ者だけが、節度の何たるかを知っている。

「私の精神」

私の内には、確固としたものに対する、ささやかな反感が住みついている。

文章を読むとき、ものを書くとき、人と話すとき、それぞれの行為を終えた暁には、それまでとは別なふうを考え、

世界を見ることができるとか——これが、私の唯一の関心事である。

「道化が一言」

自分の人生を笑い飛ばすことができたなら、それ以上の何を求めようか！

「私の書き方」

私は自分のために書く。

ものを書くことができなくなったときに、それでも自分自身を楽しめるように、自分と共にいることができるように、いわば自分に先駆けて、書いておくのだ。

「山の中で」

友よ、友達という概念は、もう随分前に捨てたはずだな？

「私の考え方」

私は作品の構想はしない。そうではなくて、ただ祈りを捧げる。

静かに腰を下ろし、目を閉じて、その時が来るのを待つ。

祈りが聞き届けられることは、まずない。

しかし、ごく稀に、雲間から一筋の光が差し込んでくる。

私は目を開ける。降ってくるのは、黄金のきらめき。思わず、手をかざす——その永遠の一瞬が過ぎ去ると、感謝

の念を述べようと口が開こうとする――張りつめていた弦は緩み、固くなっていた腕がゆっくりと動き出し、目の前には新しい世界が広がっている。

私は説明はしない。記述するだけだ。

私の仕事は、新世界をスケッチし、それを持ち帰ることなのだ。私は一人の冒険者である。

「アルカディアより」

君の目指すところは、率直さという名で呼ばれている場所である。

自分を偽るな！着飾る必要はない！仰々しい物言いなんて、まっぴら御免だ！

多くのものを差し引いていくこと。何も付け足したりせずに、そのままにしておくこと。

弁解をする理由が、君には見つからないはずだ。

「私の断片」

私の文章は短い。

長々と述べ立てる、厳密に証明する、人を説得しようとする、そういうものに対する嘔吐感が、私の胸に宿っている。

私の文章は乾いている。

湿り気を帯びた空気に対する嫌悪感が、私の原動力なのだ。

私の文章は冷たい。

我を忘れて熱狂するものに対する無関心が、私の大好物である。

「これからの私」

私に未来はない。私の目の前に広がっているのは、現在と過去であり、私の家の門は固く閉ざされている。未来はどこにも存在しない。私は頼まない。

「雑踏が教えてくれる」

ああ、束の間の、影の夢。来て、見て、去る。

「これまでの私」

私は過去を振り返らない。後悔など、私には無縁である。かつてあったものに対する私の態度は、感謝と崇拝である。

過去は、動かしがたい。その不動さを、そのままに引き受け、生かすこと――過去とは、私が身に付けるべき鎧である。私は執着しない。

「声が聞こえる」

この人、何を言っているんだろう。正気だろうか。

「私の名前」

私の作品の表題は、すべて漢字で構成されている。

それをどのように読み下すか、君は試されているのだ！

そのまま読めばいいのか、あるいは受身か？あるいは、

何かが短縮されている？あるいは、君はどう思う、あるいは？

「人間讃歌」

私は人間が嫌いである。汚らわしく、腐り果てていて、何の価値もない。

私は人間が好きである。この世界でこれほど興味深く、滑稽で、愛らしいものもない！

「私の文体」

文体を整えることが内容を鍛え上げることであり、その逆もまた――

この意味が、おわかりになるだろうか？

「夢」

この作品の真の表題は、「夢幻」である。

この作品において、私の第一歩が踏み出された。

それは、夜ごとに語り聞かせる寝物語、子供が一切の先入見なく迷い込んでいく絵本の中の、ほんの一節である。

ここには、私のすべてが詰め込まれている。

どんな解釈をも許し、包み込む懐の広さ、

伝えたいことを決して伝えまいとする素っ気なさ、

実は何も言いたいことがないのではないか、そんな疑いの念を読み手に抱かせる、ひとつまみの悪意……。

そうしたものが、わずか数百の文字の間から、浮かび上がってきてはいないだろうか？

この作品は、私の挑戦である。

「いつまでも、どこまでも」

どうして、今まさに夢を見ていないと言い切れるのか？
——夢ならば、いつかは醒める——いつか、だって？それは、一体いつ？醒めるかどうかを確かめることができないならば、「夢を見ているかも」という疑いは、いつまでも残り続ける！——そのように君が疑っているときも、君は眠り、食べ、働き、楽しみ、悲しんでいるのだろうか？疑っても特に違いがないなら、好きにするがいい——そんな答えで、お茶を濁そうとするのはよせ！——いいや、納屋に置いておきたいだけさ。

「狙撃」

勝負は二回戦で決まる。この作品で私は、私の子供たちを戦わせることにした。私は彼らを愛し、時に憎んでいる。慈しみの心を忘れたことはないが、しかしながら彼らを殺すことにやぶさかでない。

彼らの戦いに終わりはない。

その踊りに果てはない。

ならば、舞い続けようではないか！

この作品は、私の実験である。

「仏を殺して」

どうして、人を殺してはいけないの？——そんな質問をしているかぎり、お前はまだ悪の何たるかを知らない。

「極北」

テオクリトスは私の友人である。この作品は、彼の生涯の一端を見せるために、書かれた。

私は、かつて尋ねたことがある。「あなたのその強い信念は、どこから生まれるのですか。固く持ち続ける秘訣は何ですか」、と。彼は自分の腹を指して言った。「信念は胃に宿る」。そのとき、彼の腹が鳴った――結局、私はその日の夕食をおごらされた。信念は胃に宿る！彼の方が一枚上手だった！いやはや！

「私の読み方」

私はゆっくり読む。一言一句まで見逃すまいとする指、行間に、作者の思いもしなかった、そこにありもしないものを見てしまう目、文章を、そのリズムとテンポのままに味わおうとする口、登場人物の声なき声を拾おうとする耳、私の内なる情熱を吹きつける鼻――私は全身で読む。

私は私の魂をかけて、作品と対話するのである。

「分身」

おや、この作品のことではないか！

それにしても、これを書いているのは、誰なのだろう。

私と名乗っている君は、一体どこのどなた？

あっ、静かに！何か聞こえた？声が？どこからともなく、しかしはっきりと――君か、君がそうなのか……まだ見ぬ君が？――そうか……これが私であったのか。

この作品は、私の自伝ではない。

「追記」

私の次回作は、「木霊」。ご期待ください！

「あとがき」

この作品に書かれていることは、すべてフィクションである。

信じてはいけない。

「プロローグ」

万事は始めに帰る。結末に序章が置かれていても、おかしくはないでしょう？

これは道具箱です。しかるべきものを選び、しかるべき時に使ってください。

道具たちも喜びます！

「エピローグ」

さあ、いかがでしたか、異国の方よ！

微笑ましく、馬鹿馬鹿しく、ときに安らかな眠りを誘う博覧会は、ここまでです。お祭りは終わりました！

しかし、異国の方よ、感じませんか？

魔法にかかったままの、ぼんやりとした日差しを。夏の暑い日の逃げ水の予感を……

そう、そうです、異国の方よ！

道はまだ続きます。迷路になるのは、これから！

しかし、それは後の楽しみに取って置きましょう。今日は、ここまで。

だから、異国の方よ、どうかお達者で！

またのお越しをお待ちしております。いえ、こちらから伺います。次は、あなたの番なのですから――